



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

られたものではありませんが、祭官階級が文書の全てを取り仕切っていました。それ故に「神」という姿を通さないと機能しない世界を我々は見ているのだと思います。ですから、各種の概念、要素が神にされています。そうしたものの中、古くからの、あるいは普通の「神々」はデーヴァです。その他に、インドイラン共通時代に、インド・ヨーロッパ祖語段階には遡れない新しい神々が出てきます。

それらはすべて社会制度の神々です。その古い姿は、だいたい『リグヴェーダ』に残っている姿に当たると私は推測しています。その理由は、後に申し上げるつもりです。

資料の2ページの初めに挙げてありますが、ヴァルウナ (Varuṇa)、ミトラ (Mitra)、アリヤマン (Aryaman)、バガ (Bhaga)、アンシャ (Amsa)、それから、6番目は自由に使えるようになっていて、空にいます。最後はダクシャ (Dakṣa) に決まっています。このほかに8人目の、これもインドイラン共通時代に遡る神話がありました。非常に美しく、慰めとなる「人類と死の起源」のお話です。人は死と合体することによって、原初の完全な姿に戻るといふ神話ですが、今日は触れません。

この七つの神さまは神という姿を取っていますが、実際には守らなければならない社会制度の掟です。特に、筆頭に位置する「王権」の神格化であるヴァルウナがアスラ「主」と呼ばれることから、「アスラとその他の者たち」という意味で「アスラたち」とよばれるものと解されます。普通は「アディティの息子たち」(ā́dityās)と総称されます。これについてはすぐ後で述べます。

イランではどうなったかということは、その下と2.5.とに書いておきました。複雑な経緯を除外して出発点と終着点だけを見ますと、おそらくイランでは、ヴァルウナがアブラマズダーに改作される。ミトラ、「契約」という普通名詞ですが、イラン語形はミスラ (Miθra) です。子音の前では、閉鎖音の閉鎖が弱まり、摩擦音に変わるものです。これは太陽神

と重ね合わされますが、外人部隊を通じて西の方に伝わり、ヨーロッパのミスラ教ができます。ミスラ教については、最近ではメルケルバッハ (Merkelbach) の本が出て以来、1冊で大体資料が全部見られるようになりました。収められている図版も良く、たいへん重要な本です。メルケルバッハはマインツのギリシャ語学者です。最初のほうに『リグヴェーダ』のミトラやイランのミスラに関する紹介が書かれていますので、そちらもご覧ください。どうして西方に伝わったのかということについて、彼が的確に指摘しているかどうかは知りませんが、結論としては明らかで、外人部隊の存在です。

ペルシャ戦争というのは、ギリシャ側のイラン系傭兵対ペルシャ側のイラン諸部族の兵士、現実には両陣営に同じイラン系の人々がいて戦っている部分があるわけですね。イラン系の外人部隊にはそれ程伝統があるわけで、ローマの傭兵には、特にサカ族、ギリシャ語でスキュタイと呼ばれる、サカ族の傭兵が多く、また一番強いわけです。これはイラン語派の人々に限らない古代社会の現実であったと思われる。あるいは、インド・ヨーロッパ語族の伝統であった可能性もあります。古代エジプトのラムセス3世(紀元前12世紀)の軍勢と押し寄せた「海の民」との海戦の様子がMedinet Habu神殿に描かれています。両軍に「海の民」出身の兵士がいることが髪型服装などから確認できます。「海の民」の由来は不明ですがインド・ヨーロッパ語族に属する人々が中核になっているものと推測されます。

外人部隊で出稼ぎをしている人たちとヨーロッパの荒くれ者が、一緒に兄弟仁義の儀礼をするのがミスラ教の地下寺院と考えられるのではないのでしょうか。地下の岩屋は、ミスラ教の岩絵に描かれている夜の太陽が沈んだ岩屋を想起させます。日本の天の岩戸を思わせるところがあります。それを模したようなところで結社の杯を回す。オリオン座を描いたものでしょうか、ミスラ神が空で牛を殺している図象が正面にあります。ワインをそれから滴る血



に見立てて飲む儀礼が想像されます。ヨーロッパまで広がったミスラ教の基には、イラン系の傭兵の存在があります。

アリヤマンは、アヴェスタでは「教団」というような意味で現れはしますが、殆ど役割を果たしていません。

バガは重要な単語で、「神」という一般名詞になり、今日も使われます。ロシア語にも、ボグ (*bogŭ*)^{イヴリツク}「神」という語がありますが、この語です。おそらくインドイラン共通時代に何か大きな変革があり、その余波が近く、おそらくウラルの草原地帯の北側にいたスラヴ語派にまで広がったものと思われます。バガだけでも、そういういろいろな問題が出てきます。インドにもその余韻なかったかという、これは非常に面白い問題に繋がる可能性があります。もとは「配分」という意味の普通名詞で、略奪行、戦闘、交易などの成果を契約 (*mitrá-*) に基づいて配分する、その配分を保証する神です。

〈アディティとその息子たち〉

そういう神々があつて、しかも、これらの神々は一人の母から生まれたものとされています。その母はアディティ (*Aditi-*) という、「無拘束、自由」という名前の女です。母から彼らが生まれますが、この母は誰から生まれたかという、自分の産んだ末子ダクシャからとされます。ダクシャは職業能力をいう語です。卵と鶏のような誕生の円環が述べられますが、完結した円環は永遠を保証するという観念に重みがあるようです。いずれにせよ、末子相続の表現が見られます。今日まで、インド・ヨーロッパ語族には全くなないとされてきた母権社会が『リグヴェーダ』にはつきり出ています。しかも、母神アディティに当たるものをも含めて、インドイラン共通時代に遡らせることができそうです。

つまり、インドイラン共通時代に何か相当に大きな変革があつた。現地の文化と遭遇して、その新たに出会った文化が相当に強力で、制度的な問

題をクリアする必要に迫られた、そうでないと生き延びることができなかった、そういう状況下で、外圧から借りた観念を神々として表象し伝えているのだと私は思っています。

その強力な遭遇相手とは。それが最近、発掘その他で重要な関心事になっているトルクメニスタンの「バクトリア＝マルギアナ考古複合」ではなかろうか、というのが最近の話題です。実は、11月の半ばにゴヌールというところで国際会議がありまして、そのために独裁者といわれるニヤゾフ大統領(12月26日に逝去とのこと)はわざわざ大変立派なホールを建て、世界中から学者を呼んだそうです。私は入れてもらえませんが、フィルムを観て、本当に残念でした。ますます重要になりつつありますが、おそらくこれでしょう。大規模な城塞都市が出てきます。紀元前、既に3000年ぐらいのところまで遡りました。どこまで前史が辿れるものかまだ解りません。発掘はサリアニディ (*Sarianidi*) というアカデミーの学者が一手に取り仕切っています。広大な土地で、ブルドーザーで発掘するのだそうです。サリアニディ自身の見解は無理だと思えます。つまり、インド・ヨーロッパ語族のインドイラン語派の人たちの居城だということです。そんなことは考えられません。移動する遊牧略奪民族であり、物質文化を軽蔑していた人々に、あんな頑強な都市があつたら、厄介で生活できないでしょう。彼らはむしろ平原を閉ざす、土地を囲い込む人々を敵視しています。フィンランドのバルポラ (*Parpola*) が、ある程度サリアニディと協同しているようです。

似たような事態は、実は黒海の沿岸で、紀元前4500年ぐらいに起きています。それがマリヤ・ギンブタス (*Marija Gimbutas*) の発掘した一連の「クルガン文化」です。それによりますと、ドニエプルの中流域に馬に乗った人たちが突然現れる。乗馬によって、東西2000キロほどの土地を放牧することが可能になったということです。その人たちが紀元前4500年ぐらいにドナウの下流域に達します。ドナウ



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

河口というのは、テレビで見ただけですが広大な湿潤地帯で、どうもインド・ヨーロッパ語族の祖先が暮らせるようなところではないようです。そこをどういう経緯によってか、彼らは越えたわけです。ドナウの下流に届けば、もうブリテン島までヨーロッパ中に一気に道が拓かれます。このことは歴史が繰り返し証明しているとおりです。当時もすぐにブリテン島まで文化が波及しますが、それをギンブタスは印欧語族の拡大の波と解釈しました。

それまでのヨーロッパには、女性中心の平和な、城塞を必要としない自然な村落の状態があったのだと。そこに突然、ドナウの下流に防塞都市が出てくると彼女は指摘します。なぜそのようなものが必要であったかという、野蛮なインド・ヨーロッパ語族という連中が暴力をもって拡大していったからだ、ギンブタスは見たわけです。

地中海では、城塞都市は紀元前3000年ぐらいの段階から知られていると思いますが、やはり、インド・ヨーロッパ語族の進出、または、その余波から身を護る必要を考えるのが一番簡単な答えと思われる。今日ご出席の皆さんがよくご存じなのは、「海の民」だと思います。「海の民」もこうした一連の問題に繋がります。あとでそのことにも、少し触れると思います。

ギンブタスは西側しか見ていませんが、これを東側に当てはめると、インドイラン語派の人々が順番にどこから出てきているわけです。そのインドイラン語派の人々が東に進出した跡というのは、おそらく、母権社会との遭遇といった、このような事柄から間接的に確かめられるのではないかと思います。

信憑性がなくなるといけないので、空想は控えた方がよいでしょうけれども、ロマンをさらに掻き立てれば、最近NHKで紹介されました、楼蘭の謎の美女、かの地にも当時、平和で母権的な世界があったように思われます。女性の単独埋葬はインド・ヨーロッパ語族には考え難いでしょう。(ギンブタスはドニエプル中下流域に、紀元前4000年前後のサ

ティーの風習を示す墓があることを指摘しています。サティーとは、ヒンドゥー社会に見られるとされる、夫が死ぬと殉死させられる夫人のことです。)楼蘭の墓からは多量の麻黄が出ています。『リグヴェーダ』や『アヴェスタ』には知られない小麦の栽培もなされていたようです。これらの地域にもインド・ヨーロッパ語族、具体的にはインドイラン語派の人々(可能性としてはトカラ語派の人々も)が進出した可能性が考えられます。もう少し後になりますと、サカ族を中心とするイラン系のもとは私に思っていますが、アンドロノボ文化というものが、より東に寄った方に出てまいります。

印欧語族はギンブタスが見たように西に拡大しているだけではなく、実は東にも拡大していて、実はその東に拡大した人たちが、宗教の歴史に果たした役割も、現代社会を理解するために重要であるように思います。つまり、ゾロアスター教とその背景にあるものを理解することが、後の宗教の組織化を理解することに繋がりはしないかと思います。ゾロアスター教は一神教と呼ばれる諸宗教にある種の厳しい組織化を与えてしまったと思うのですが、「しまった」というのは、私の素朴な個人的な態度ですのでお聞き逃し下さい。

話が大幅広がってしまいましたが、インドイランの神々がもともと英雄神、天や地の神さま、自然神たちと、それから社会制度の神々との二重構造になっていて、これがインドとイランの出発点ということです。そして、何故二重構造になったのかということ、どうも印欧語族本来のものではなく、ユーラシアの遊牧民は契約によって生き延びていかなければならない契約社会ですから、何か強大な文化圏と遭遇した時に、それを受け入れたものと考えられます。ヒッタイト語の発見も、王国の中央資料館、アルヒーフ(アーカイブ)が発掘されたからです。資料館とは何であったのかということ、契約文書を保存するためのもので、契約文書は何10年か毎に書き直してコピーを作り各地に保管していたことが資料自身



から知られます。そうでないと、国が守れなかったわけです。メソポタミアでは、協定に従って国が守られてきた。このことは、おそらくカスピ海の東側にも当てはまった、あるいは、当てはまる時代があったものと思われまゝ。それをインドイラン語派の人々は神々という姿で取り入れた。ゾロアスターは、さらに、そのなかの筆頭である、王権、主権の神格化である神を改作して、理性の神に持っていった。こういう筋書きを考えております。

〈『アヴェスタ』の女神〉

先ほど『リグヴェーダ』の母神アディティのことを申しましたが、『アヴェスタ』には女神、アルドウィ・スーラー・アナーヒター (Arəduui Sūrā Anāhitā) が出てまいります。これについて言及するのを忘れておりました。ゾロアスター教の神殿といえますと、アフラマズダーの祭火と、もう一つ隣に、アルドウィ・スーラー・アナーヒターという女神の祭火壇の二つを備えていることが普通です。この女神の名前は3語から成っていますが、Arəduui は「促進助長する、豊にする」、Sūrā は「勇敢な、膨れ上がる」と解されます。Anāhitā という語は、今まで「汚れのない」と解されてきました。私はそうでなく、「結びつけられていない、縛られていない」意味の形容詞であるということ、資料2.3.に挙げた論文の中で僅か一頁程ですが書きました。その後すぐにオエッティンガー (Oettinger) がそれを利用し、ケレンス (Kellens) というコレージュ・ド・フランスの教授で現在アヴェスタの専門家としては最もポピュラーな学者と思われまゝ、彼もこの説を採用した上で、さらに論文を書いてくれましたから、ほぼ定説と言ってよいでしょう。要するに、アディティとアナーヒターは、ほとんど同一の意味を持つ語彙です。しかし、両方とも違った語形で作っている。インドイラン語派の諸言語は共通の起源から出ていますから、違った作り方をしているということにはそれなりの理由があるわけ。私は借用翻訳語だと解釈しています。

オエッティンガーはアムダリヤー、つまり、オクソス川のことで、氾濫と河道の変更を謂うものとする論文を書きましたが、私は、ギリシャの方まで広がっているアプロディテーのような、豊穡の女神の崇拝があったのではないかという気がします。具体的に、ある河川を指してこれがその豊穡の女神の姿である、と同一化されたことはあり得ます。何か女神崇拝があって、ギンブタスの言うヨーロッパの昔の土偶などに表される豊かな女の人を尊んだ、あの平和な一種母系的な社会に通じる要素なのではないかと思ってしまう。ただ、その平和な社会にも、相当厳しい社会制度があったことになりまゝ。要するに、自由の女神です。自由の女神からこれらの社会制度が生まれた。よくヨーロッパの伝統では、これらの神々は「縛る神」と呼ばれます。どこに基がある表現か知りません。縛る神々が、縛られていない女神から生まれている。つまり、法さえ守れば、その中では君は自由だという、そのことが自覚されていた厳然たる事情があるといわれています。おそらく正しいでしょう。

母神は他の文化に起源を持つとしても、ルールを守ればその中で君は自由であるという観念自体はインド・ヨーロッパ語族の各語派の社会に見られます。そういう意味での自由を100パーセント持っている者が部族の完全な成員ということになります。ただしインド・ヨーロッパ語族に属する部族社会ではあくまで男、それも家長だけが問題になりました。その一人一人がアリ (arí-) であり(ただし、敵対関係にある部族の成員も同じ語で呼ばれる)、アリヤ (aryá-) というのは部族に属するという形容詞と思われまゝ。インドに入った人たちは、その部族の慣習法を身に付けているという意味で、さらにもう一段、アーリヤ (árya-) という形容詞をつくりました。インドにもアリヤという単語がありますが、「部族の成員に属する」を意味すると思われまゝ。この語の男性複数所有格がアリヤーナム (*ariānām) という語で、新アヴェスタ語にも、古ペルシャ語にも



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

— : 1987

出てまいります。このアリヤーナームの中世ペルシャ語形が、アリヤの「ヤ」によってウムラウトを起こしまして、エーラーナーン (*ērānān*) となります。そのエーラーナーンの現代イラン語形がイーラーン (*īrān*) という形ですから、イーラーンというのは「アリア人たちの国」という意味です。

そういう部族、慣習法とか、社会制度の神、そうしたものがはっきりと概念規定される過程に異文化との遭遇があったということになるのでしょうか。部族の成員であるとはどういうことか、さらに、血族関係がどの程度重要であったかなどの問題が、しかも歴史的展開の中で浮かび上がってきますが、全く将来の課題です。

〈「神聖な不死の者たち」〉

『アヴェスタ』には「神聖な不死の者たち」という、聖霊のような七つの存在があります。いろいろな解釈がありまして、アフラマズダー自身のアスペクトだといわれることが多いようです。この観点はユダヤ教を見る時にも一つの視点となるかと思いますが。

唯一神といってもそれで全て片付くわけではなく、それぞれ必要な役割を担う存在があります。それらは「神聖なる不死の者たち」という形で数え上げられます。不思議なことに、「7」とははっきり述べられていながら、七つ挙げられることは比較的少なく、古いきちんとした列挙では6です。これには、インドの「アディティの息子たち」が7人と呼ばれながら固定されているのは6だけであるという事情が思い合わされます。ことによると、ゾロアスター教は『リグヴェーダ』に見られるような組織をインドイラン共通時代から受け継いでいて、それを完全に置き換えたのではないか、という可能性が思い浮かびますがどうでしょうか。少なくとも全く証明はできません。

その7の徳目のうちの、はっきりと出てくるのは、(1)「よい考え、思考」、良い(またはせいぜい: 善い)考えで、「正しい」ではありません。(2)「最善の真理」、「真理」は初めの方で述べたインドの「天理」と

いう語 *rtá-* から作られた形容詞で、「天理に適っていること」の意に解されます。アシャ (*aša-*) といいます。アシャは、アルタ (**árta-*) からの音韻変化です。この位置にアクセントがないとこの形になりません。(3)「望まれるべき支配権」。要するに、望ましい支配権ですが、わざわざ動詞の派生形を使っていますので。クシャッスラ (*xšaθra-*) はインド語にも対応がある「支配権」です。(4)「神聖な正しい思考の備え」。この辺り愚直訳で申しわけありません。「神聖なる心の準備」でしょうか。しかし、「心」ではなくあくまで「思考、考え、思い」です。(5)「全きこと、五体満足であること」。これはある意味残酷な思想ではありますが、全部そろっていることです。(6)「不死であること」。その具体的中身はわかりません。以上が挙げられています。

スプンタ (*spənta-*) という単語が「神聖な」と訳されるのですが、これにあたる単語はインドにはありませんし、インドで「神聖な」という感じの概念にはあまり出合わないように思います。仏典で「聖」と訳される語は前に出てきた「アーリヤ」で、本来「一人前の人にふさわしい、上位三階級の成員に該当する」位の意味の形容詞から出発しているように思われます。従って、この「神聖な」という単語が出てくるところで、ゾロアスターは一つ大きな跳躍をしている気がいたします。スプンタという単語は、他の言語にはあまり残っていませんが、ロシア語の『聖書』の翻訳に用いられる語に対応があります。古代教会スラブ語ではシュベント (*šveñas, švetú*) です。これはまったく同一の語形に遡ります。多分「神聖な」という単語の元になる要素は印欧祖語にあったのでしょうか。いずれにしてもスプンタ (*spənta-*) という語にはゾロアスター、ゾロアスター教の特別な性格が反映しているように思われます。

それならば「神聖」とはどういう意味かという、私には解りません。言うまでもなく、これは突き詰める必要のある問題です。今のところ、幸をもたらすということが一つ、それからあるべきものがあるべ



きところにきちんと完全に備わっている状態、さらに、病気になるたら直すとか、そういう方向に思えるのですが。ドイツ語でハイルなど (*Heil, heilig*) と訳すことが多いのですが、案外本来の意味としては近いのかもしれませんが。

ちなみに、ハギオス (*hágios*) というギリシャ語は、「讃えられるべき」という形容詞です。これは私どもの「ヴェーダ」ではお馴染みの語彙のグループに属します。そのまま置き換えるとヤジュヤ (**yajya-*) となるはずですがこの語は無く、代わりに、ヤジュニア (*yajñīya-*) 「讃えられるべき、祭式にふさわしい」が大凡対応するでしょうか。インドでは「祭式、儀礼」という方向に重点が移ってゆきます。『アヴェスタ』には「言葉で神を讃える」という基の意味がより強く残ります。

＜インドの道、イランの道＞

さて、それではインドとイランとで、神々の二重構造がどのように展開していったかを見ます。資料では2.5.に当たります。それぞれ別の道を辿りました。

インド側では、新しい社会制度の神々、アスラたちを怖い神々と感じ、昔からの気楽な神々、デーヴァたちを選びます。インドの地に入れば一種袋の中のような環境で、農耕に適し、おそらく原住民は素朴で、暮らしやすく、契約、制度といった面倒なことは嫌いだったのではないのでしょうか。昔からの気楽な神々を鼻屑にして、デーヴァが「神々」の意味になり、アスラたちは怖い神となって、仏教の阿修羅へと連なります。ヴェーダの散文文献(紀元前800年頃から)では、既に「神々の敵」という意味で用いられています。

「神々の敵」というのは、やはり神々で、神話の中では最初は尊敬されているのですが、アーリヤの人々の守護神デーヴァたちに負けてしまいます。つまり、自分たちの部族ではない、自分たちの契約、自分たちの精神世界に属さない、異部族たちの守護神たちという意味合いになります。地上の人間

たちである「マヌの子孫」は、デーヴァたちのグループと契約を結んでいて、地上での生産を常に天界に送り届けることになります。それに対して、よその部族を守る神々がいて、彼らはアスラとよばれ、悪い神々になってゆきます。

アスラたちの持つ「恐ろしさ」ということについて一つ挙げておきます。最初に引いた『リグヴェーダ』の「天と大地の歌」の第3詩節に「かの車を御し、浄化手段をもつ両親の息子太陽は、賢者として万物を清める、不思議な力を用いて」とありますが、この「不思議な力」に当たる単語がマーヤー (*māyā-*) です。ここではプラスの価値で用いられていますが、だんだん価値が下がり、「魔術、欺瞞」の方向が強調されます。後には哲学文献などで現象世界を「幻影、ファントム」であるという意味でこの語を用います。『リグヴェーダ』の本来的な文脈では、マーヤーは「計算能力」を意味します。例えば、建物を建てる時、特別能力のある人が計算して、予め解って建てる。普段掘って立て小屋を建てる時には予定調和的に建てられるでしょう。臨時の建物ですから。しかし大きなものになりますと、測り設計しなければなりません。その測り計算する技術は一部の頭の良い人たち、計算能力のある人たちに独占されていて、アーリヤの人々一般はそれをよそよそしく感じて恐れ、その結果マーヤーという単語の価値が下がっていったものと思われます。マーヤーは、アスラたちに属する概念といえるでしょう。

イラン側では、デーヴァのほうが悪い神、ダエーフ (*daēuua-*) というのがアヴェスタ語形ですが、神の名に値しない悪い神々、正しくない人々を助長する神々、事実上「悪魔」になります。インドのアスラに当たる「アフラ」の方は、アフ라마ズダーという唯一神になります。文献には「アフラ」の変化が跡づけられます。「ガーサー」はゾロアスター自身の言葉と、私は簡単にそう考えて支障ないと思います。印刷して30ページぐらいになるでしょうか。ゾロアスター自身の言葉ではなかったら、どう考えてもあ



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

なに複雑な言い方はしないだろうと思われま
その『ガーサー』の中で、彼はその主神を「マズダー」と、先ず呼びます。そして、「アフラ」と付け加えます。普通はその間に別の単語が入ります。しかも、マズダーというのは女性名詞で、普通は「知恵」などと訳されます。ゾロアスター(ザラトゥシュトラ)はこれを主格単数ならば -s という語尾を付して男性名詞として用います。いわばドイツ語で *die Weisheit* というところをわざわざ人格化して *der "Weisheit"* と言うようなものです。ドイツ語でこう言うと、ドイツ語圏の人は嫌な顔をしますが、そこで、誤解のないように、*der Herr*, *the lord* に当たる「主人、主」の語を付け加えます。ところが、教徒たちが作った新アヴェスタ語の文献になりますと、アフラ、マズダーと順番が変わり、しかも、続けて呼ばれるようになります。つまり、「主たるマズダー」です。ゾロアスター自身は「知恵の神」、それは「主という意味での知恵だ」と言っているのを、「主たる知恵」と信者は言い換えます。さらに新しい層、また、ダリウスの碑文などになりますと、「アフラマズダー」と一語になってしまい、しかも、神の名のように変ってゆきます。

余談ですが、私は「マズダー」という単語は、「理性」なのではないかと思っています。マズダーの「マズ」という部分はインドのマナス(*mánas-*)、古イラン語マナフ(*manah-*)、ギリシャ語 *ménos*、ラテン語の *Menerva* の *mener*⁰ の部分にも含まれる語の弱い形に当たり[△]
「考えること、思考」、頭にある思考作用のことです。ダーは英語の *to do* の *do*、ドイツ語 *tun* と同起源の動詞語根をそのまま名詞として用いたもので、フランス語の *faire* 「創る」なども同じこの語根 **d^heh₁* 「定め置く、取り決める」に遡ります。つまり「思考を定める、意を決する」という意味が想定されますので、「理性」に近い意味が基にあった可能性があり、それはまたゾロアスター教の性格にも合うように思われます。ゾロアスター教徒は常に善悪を判断して、例えば悪い動物を見たら殺さないと自分が罪を負

うことになります。そういうヒステリックと言えるほど厳格な宗教ですので、「マズダー」の語の中身にも個人の理性的判断、決意という要素があってもおかしくないと思われま

個人主義ということだけに限れば、ヴェーダにも意外な側面があります。実はこの個人主義が「業」と「輪廻」の出発点ともなっています。そんな個人主義があったのかという、驚くような宣言が祭式でなされます。親子の縁というものは、はっきり無視というか否定されます。個人主義は印欧語族の拡張の秘密とどこかで絡んでいるように思われま

ゾロアスター教では信仰告白という概念がはっきり出てきます。既にゾロアスター自身の言葉「ガーサー」の中にフラワシ (*frauuas̥i-*) 「選択」という単語が出ております。サンスクリットに訳せば、**pravárti* に当たるところです。この概念は、後には精霊になり、天使と同じような姿で飛行したりしますが、もとは「信仰告白」という意味です。

〈ゾロアスター〉

では、ゾロアスターはいつ頃の人かということ、決定できない問題です。ザラトゥシュトラ (*Zarathuštra*) の名前は、ザラット「歳をとった」とウシュトラ「ラクダ」の複合語です。「歳をとった」ということは必ずしも悪い意味ではなく、私は、その人が飼うとラクダが長生きするという意味に解しています。学者のなかには、良い名をつけると悪魔に狙われるので悪い名前をつけたものだとか、ザラットというのは「黄金」の意味で、「黄金のラクダ」の意味だとする人もあります。伝統的な解釈「歳をとったラクダを持つ人」で良いと思います。これにギリシャ語の似た音の語を当てて、ゾロ「黄金」のアステル「星」で、「金星さん」というふうに音写されたわけ

イランのどの部族の出身かも決定できませんが、宗教改革を起こした土地は、やはり先ほど出てきましたアフガニスタンの山岳地帯、乃至、トルクメニスタン、イラン、アフガニスタンの国境地帯を中心と



する地域と思われます。

年代は、ゾロアスター教徒の伝承ではダリウス王の何年前と計算して、紀元前6世紀というのが中心ですが、その言語からは紀元前6世紀とは到底考えられません。『リグヴェーダ』より一段古い言語段階を示します。そう言うと単に反論に遭うだけに終わりそうですので書きたくはありませんが、紀元前1200年を下らない頃と思っています。普通このような見解に立つ人は遠慮して「紀元前1000年以前」という言い方をして済ませるようです。例えば、ハーヴァードのヴィッツェル (Witzel) はそう言います。私は文法の専門家ですので、その見地からするともう少し古いと考えたいのですが、これは片付かない問題です。学者というのは一般的に批判的であろうとすると「新しい」という指標に注目する傾向がありまして、『リグヴェーダ』にしても紀元前800年とか、もっと新しく言う人もいます。あくまで、リグヴェーダを専門的に研究しているのではない学者たちの中には、ということですが。

ゾロアスター教を教徒たち自身は「マズダヤスナ」教と呼びます。マズダヤスナの「マズダ」はマズダー、「知恵」と普通解される主神の名、「ヤスナ」は先ほど触れましたギリシャ語ハギオス「聖者」のハグまでの部分に当たる動詞語根から作られた名詞、インドのヤジュニャ「祭式」に完全に一致する語です。「マズダーを讃える」と言う形容詞です。

〈インドイランの宗教と死後の道〉

こんな解説ばかりしておりますうちに、与えられた時間が迫ってしまいました。私はインドイラン共通時代から考える必要があると思います。一神教その他を考える時に、どうしても直面しなければならない事柄として「終末論」の問題がありますが、はっきり出るのはイラン側です。「終末論」といっても、中身はいろいろな違った意味で言われる部分があると思います。要するに「裁きの日が来る」という意味で考えたいと思います。最終的に世界が終わって…。

これがはっきり自覚され、教説になるのはイランの宗教においてだとしても、その淵源はインドイラン共通時代にあるのではないかと思ひまして、資料の3.に挙げてみました。殆ど飛ばさなければならなくなりましたが。

『ハドーフト・ナスク』(Haḍōxt Nask)という本がありまして、この中に死後の記述、正しい行いをした人と悪い行いをした人が死んだらどうなるか、という記述があります。

三日目が過ぎた夜明けに南風が吹いてきて、それと同時に「宗教的な配慮」というもの、ダエナー (daēnā)、サンスクリット語でいえば、ディヒヤー、ディヒヤーナ「思慮、静慮、禅」に近い語ですが、それが15歳の美しい娘の姿で、彼の「魂」(ウルワン)の前に現れる。どんなに美しいかという形容詞が並びます。女性であるのはこの名詞が女性名詞だからです。「おまえは誰だ」と尋ねると、「私は君の魂、君の良い思考、ダエナーです」と答えます。「もともと私は愛らしかったけれど、君のおかげで、より愛らしくなりました」と言います。その他省略します。魂はそれから4歩で、すなわち星の世界、月の世界、太陽の世界、それからもう1歩で無始の光、始めがない光の世界に達します。

その世界に達すると、今度は尋問を受けます。「おまえは誰だ。どうやって来たのか」という内容です。するとアフラマズダーがその問いを遮って、「彼に質問するな」とやめさせます。「追放のある危険な道、骨と意識の分離に通ずる道を歩んできた彼に問うてはならない。彼に春のバターを与えろ」とアフラマズダーは言います。

「骨と意識の分離に通ずる道を歩んできた彼に問うてはならない」、これはいろいろ違ったふうに訳されていますけれども、最近、ピラス (Piras) という人が原典とイタリア語訳を出しまして、テキストが容易くチェックできるようになりました。骨と意識が分離するということは、魂が独自の旅をしていくということになります。この問題をどのように解釈し解決



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

してゆくかについて、インドとイランとでは違った道を辿ります。大切なのは、自分の良い行為の成果、徳目とは死後に再会するのであって、現世の自分の身体の中に良い行為、良い思い、良いことばの効力・成果が蓄えられ、それを地上で使う、というわけではないということです。死んだ後になって使える天界に蓄えられた貯金だという観念が出発点になっています。

これはインド側にも生き残っておりまして、資料にインドにおける二つのヴァージョンを紹介しておきました。

先に挙げたジャイミニヤー・ブラーフマナ (Jaiminiya-Brāhmaṇa) の説では、自己(アートマン)が、息子と天界とに二重に再生します。これは一種の折衷案で、正統説とは言えません。伝統的な「息子のなかに生まれ変わる」という説を何とか救おうとしたものです。インドやイランに見られる「自己の存在と死後の旅路」の理論を突き詰めてゆきますと、個人と親との関係は偶発的なものということになり、あくまで個人の存在だけが問題になります。この延長上に「業」とか「輪廻」の理論が展開するわけですが、今日はこれには立ち入りません。

要するに、個人は親と関係なく、ずっと生き続けているのです。その個人が死ぬと、息(プラーナ、*prāṇa-*)が出て行きます。その「息」が神々の前で「この人は生前これだけ良いことをしました、これだけ悪いことをしました」と報告します。すると、今度は「季節たち」がやって来て尋問します。謎かけ問答です。その謎かけ問答をクリアしますと、太陽に到達します。太陽に至ると「君は誰か」と問われます。「誰か」と問われたときに、「私は後藤敏文です」と答えますと、「そうか。おまえのアートマンはこれだよ」と言って返してくれる。その返してもらったアートマンの力で天界で暮らし、再び地上に戻る道、つまり輪廻の道へと戻るということになりますが、この過程は乱暴なくらい縮めて表現されています。要するに、このヴァージョンでは「アートマン」というものが天界に

蓄えられ準備されています。より古い時代には、自分の名を答えると、例えば「後藤敏文です」というと、自分の生前に為した善い行為と布施の効力が後藤家の始祖ないしは祖先全体の共有財産として召し上げられる、という観念があり、それに対する対策が講じられました。この問題の解明には、阪本(後藤)純子が優れた業績を挙げています。

すぐ後のブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド (Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad)、第二のバージョンになりますと、「アートマン」は死ぬときに身体から出て行く方で、天界に蓄えられて待っているのは、より細かく挙げられるようになりまして、知識あるいは技能と行為と。この「行為」が後に仏典で「業」と訳されるものです。行為の総体が貯めてあるということになります。それらと合体して天上で暮らし、天井での寿命が尽きると再び地上へ再生するということになります。(この辺りの事情はヴェーダ文献にではなく、後の仏典の中にタイムカプセルのように保存されています。天人五衰、人間五十年などがそれに当たります。)

出てまいります語彙をチェックしながら考えてみますと、インドイラン共通時代の段階では、3.2.に書きましたように、アス(*ásu-*)「実在」という、まったく抽象的な観念が死後、存続し続ける。アスがヤマ(Yama)という人間の第1号、閻魔さまですが、彼の2匹の犬に食われずに通過できると、天界で、自分が地上生活でそれまでに貯めてきた行い(正確には、考えること、話すこと、行うこと)の成果・効力と合体して、次の世、あるいはイランの場合には裁きの時まで、良い暮らしを享受しながら待つことができる。インドの場合には、天界で良い暮らしをした後、再び地上に戻って来る。良い行為が貯めてあれば、良い生まれへと戻って来ることができる。このように展開してゆきます。

イランのゾロアスター教には裁きの橋に当たる「チヌワントの橋」という概念が出てまいります。「チヌワン



トの橋] *cinuātō pərətuš* という語はゾロアスター自身の「ガーサー」に既に3度用いられています。チヌワト (*cinuātō*) というのは「償う」という意味の動詞の現在分詞チヌワント (*cinuant-*) の単数所有格形で、ギリシャ語にも確かめられる現在語幹の形成法から判断して、この意味以外にはありえません。1987年に出版されました私の研究書の中で明確にされており、マイルホーファー (Mayrhofer) の語源辞典もこれを採っておりますが、アヴェスタ研究者の間では未だに一般の見解とはなっていないようです。ケレンス (Kellens) など「積み重ねる人」などとしており、大変消耗であります。「橋」にある単語は英語のフォード (ford)、北欧語のフィヨルド (fjord) などと同一起源の語で、ラテン語、ケルト語にも対応語があります。インドでも、仏典 (Suttanipāta 674) に「剃刀の刃を流れにもつ歩み難い」死者の渡る川が言及され、カタ・ウパニシャッド (Katha-Upaniṣad III 14) に「研ぎすまされた剃刀の刃は渡り難い」と述べられ、また、これらより遅れて成立したウパニシャッドには「不死の最高の橋」(SvetU VI 19)、「不死の(不死に至る)橋」(MuṇḍU II 2, 5) が現れるなど、ヴェーダ文献の中で磨き上げられることなく残った思想の中に、インドイラン共通時代に遡る観念が生き続けていたことが偲ばれます。因みに、このインドの「橋」は跳び石を配置した(「散らした」)ダム形式の渡し場で、「フォード」に中味としてはおおよそ対応するかと思えます。

アヴェスタの「償う人の橋」が描かれたものが比較的近年意外な場所から複数見つかっております。資料の右側に挙げておきました。中国の西安から出ました紀元後6世紀のソグド人商人の墓だそうです。最近京大教授に転じました吉田豊さんが、この墓のソグド語碑文の解読を担当したそうです。紀元後6世紀ですから、ゾロアスターの時代から比べると1500年以上は後のものです。

ヤマの犬が描かれているのが解るでしょうか。右の端の方に2匹(2頭)の犬があります。『アヴェス

タ』では、『ヴィーデーヴダート』という書に、チヌワントの橋を護る2匹の犬が言及されています。インドの『リグヴェーダ』における「ヤマの2匹の犬」は、一方は四ツ目の斑の犬、要するに、眉のところに黒い斑点がある犬、一方は赤茶色の犬と、より細かく述べられています。おそらく当時流行した猟犬のタイプと思われます。ギリシャのケルペロスなどとも、どこかで繋がっているのではないのでしょうか。もともと印欧語族の文化財に属していたものか、どこから広まった二次的なものか解りませんが、文化的なものはすぐに広がりますので、いずれにしても、そのヤマの犬がいます。

ずっと上の右側に円周があり、中に人と牛たちとが描かれていますが、ここが魂の終着点ということのようです。『ガーサー』にある「牛の魂」を思わせるところがあります。肉体が下に落ち、魂だけが上に上がっていく情景と解釈されているようです。

橋を渡っている人をご覧ください。夫婦と3人の子どもたちです。この墓の図には商人 Wirkak (史君) の一代記が描かれており、吉田さんの解読によると、夫婦は仲がよくて、奥さんは何カ月後に亡くなっていますので、夫婦が同時に橋を渡ることはいえるかも知れません。しかし、息子3人も一緒に渡るということは、魂が天界かどこかで待っていて、裁きの日が来る、という条件があって成り立つことです。要するに、「裁きの日」という終末論が前提とされているわけです。これはどこまで遡れる観念でしょうか。ゾロアスター自身の言葉の中にも、そのように解釈できる箇所があります。

例えば、単語が短すぎて明解とはゆきませんが、熱せられた鉄が一種の神判として語られます。「鉄」と言いましたが、鉄をも銅をも意味しうる未分化の「かね」(インド:アヤス *āyas-*、アヴェスタ:アヤヒ *aiia-*) という方が正確です。これがどうも「ハルマゲドン」のように解せそうです。ゾロアスター自身、どれだけ自覚を込めていたかは別として、後にはっきりと宗教の中身として構築されていきます。ゾロ



部門研究1

「一神教の再考と文明の対話」研究会

アスター自身のことばの中に少なくとも萌芽が見出されると言えるでしょう。

ただし、このような見方をすると、『リグヴェーダ』にも、かなりのものがあると言えてしまいます。輪廻でも何でも、後に構築される概念の基は『リグヴェーダ』にあるかと問えば、それは殆ど見出されます。見出されるとしても、後の展開があって初めて萌芽として確認されるわけです。つまり、後に終末論が重要な概念として意味を与えられ、組み立てられて行く、と考えられます。

〈ゾロアスター教と政治〉

インドという、西北に口が開いているとしても、カーブル峠と海に護られた、いわば袋の中の世界と異なり、イラン世界は「世界」の中に曝され、ゾロアスター教も戦って生き延びていったわけです。おそらく、ある段階でアケメネス朝の役割が大きかったものと思われます。資料にアケメネス朝の諸王の年代を挙げておきました。もちろんアケメネス自身の年代はもっと遡ります。キュロス (Kuruš, Cyros) のお祖父さんの方が紀元前639年、その頃から拡大してゆきます。アケメネス朝は、学者の中にはこれまた否定する人がありますが、どう考えても、ゾロアスター教を国教にしています。それが重要な点です。その時代には、西方のシーラーズ (イシュタッフル Staxr) と東方のアラコースシア (Araxosia、カンダハル付近) に『アヴェスタ』を学ぶ専門学校が置かれていたようです。僧の集団には、これに対応してメディアの僧 (マグ Maguš、聖書の所謂「(三)博士」) たちとアラコースシアの僧団があったようです。私はホフマン先生から習ったのですが、ペルセポリスの浮き彫りに見られる僧 (文官) と武官の僧帽 (頭巾) と袴とから出身地が解り、その配列から勢力構造が解ります。アラコースシアは、ゾロアスターが宗教を創ってから南下し、はじめに拠点を置いた土地で、『アヴェスタ』の編集に関わる土地であることが、独特の方言形の混入などから推定されます。アラ

コースシアの僧団は、日本で言えば、南都の僧に喩えられるでしょう。これに対して西イランの僧団は京都の僧団に喩えられます。「ペルシャ」というのはイラン諸方言の中、西南方言を代表するパールサ族 (Pārça、インドの *pārśva-* に対応、「脇から生まれた者」の意。歴史にはファールス地方から登場する) のことで、西北方言を代表するのが「メディア」(マーダ Māda) です。『アヴェスタ』の言語は東南方言に分類されます。東北方言には中央アジア出土資料などから知られるサカ族 (Saka、インドの Śaka に当たります。ギリシャではスキュタイ Skythai とよばれました)、ソグド族の言語などが属します。ゾロアスター自身はメディアの出身であったとする伝承があり、「オクソスの秘宝」にもメディアの習俗が見られるなど、ゾロアスター教にメディア人たちが果たした役割には古くかつ深いものがありそうです。

ダリウス大王は、自分のエジプト遠征中に反乱を起こされないように、自分の弟を殺してから出かけます。にもかかわらず、エジプトに行っている間に、その弟が国を乗っ取ります。つまり弟を名乗る偽者です。それを知ったダリウスはすぐに制圧に乗り出さず、東のゾロアスター教の中心地に討伐隊を派遣します。つまり、東のアラコースシアを押さえることが、絶対に必要であったわけです。

ゾロアスター教の重要項目の中には「神聖なる不死の者たち」の項で見ましたように、「支配権」が挙げられます。ゾロアスター教は生活方法そのものを変える「新しい生活」の運動でした。遊牧略奪生活を捨てて、定住牧畜生活を守るというものです。それを遊牧略奪民に取り囲まれた環境で達成しました。その背景にバクトリア・マルギアナの城塞都市を営んだ定住農耕牧畜民の子孫たちとの遭遇があったかどうかは解りません。ゾロアスター教徒は自分たちの生活信条を貫徹し、さらに西方のメソポタミアを含む地域に拡大したわけです。インドならいざ知らず、徳の力によって非武装中立とはいかなかったと思います。



そのような環境下では、宗教、生活信条が神経質かつ攻撃的な性格を帯びるのは理解できます。また、この「攻撃的」という性格は、インド・ヨーロッパ語族の拡大の歴史を貫く性格でもあり、さらにまた、拡大の過程で強まっていったものと思われる。

3. インド・ヨーロッパ語族の拡張

最初に起こったのが、先ほどのマリヤ・ギンブタスの指摘した「クルガン文化」時代。紀元前4500年頃を中心とした黒海に注ぐ大河川、特にドナウへの進出です。その少し後で、ウラルの草原地帯からカスピ海の東側に入ったインドイラン語派の進出、BMAC(Bactria-Margiana Archaeological Complex)との遭遇が考えられます。2番目がギリシャ諸部族の地中海への進出、第3が「海の民」、第4にアレキサンダーの遠征、5 ゴート族、6 フランク王国、7 アンゲル族、ザクセン族、ユート族のブリテン島への移住、8大航海時代からメイフラワー号まで、次はブッシュでしょうか。冗談で済むことを祈ります。

そういうインド・ヨーロッパ語族の拡張。それから、順番に一つの言語がその当時の「世界」の覇権を取ろうとしてきた歴史があります。ヒッタイト、ギリシャ、サンスクリット、それから、ラテン語によるローマ帝国の時代、それから、ゲルマン語派の諸部族の拡張が起きて、フランク族のカル大帝の時代が来ます。ラテン系のことばは新大陸を目指しました。その後は英語の時代が来て、次にゴルバチョフが出なければ未だ「世界」をものにしていないスラヴ語派、ロシアの時代だったかもしれないというところまで来たわけです。言語の支配というのが相当大きな要素となっていました。今、その最終段階に入っていると見ることもできます。

部族闘争の大きな戦い、要するに部族のDNAというか、種の戦いというよりも亜種の段階での戦いを人間はずっとしてきているのではないかと感じるところがあります。その過程で世界史が動き出した。「世界史」の存在はインド・ヨーロッパ語族の

人々の拡張主義抜きには語れないように思われます。「普遍的」という定規もその動きの中で磨かれました。私たちはその中で、どうやって生きていくのかということになります。アメリカとユダヤ「民族」が手を繋ぎますと、そういうのはないのでしょうかけれども、非常に難しい局面になってきます。中国とアメリカとの間の問題に、今、人々が多分に緊張を覚えることの裏にも、そうした背景に対する恐怖感があると思うのは行き過ぎでしょうか。

私個人としては、印欧語族の中の最も尊敬すべき人の一人であるアリストテレスの普遍的理性によって、(手島先生にとってはスピノザになるかと思いますが、そうすると「ヨーロッパ文化」と言い換える必要が生じます)、そのようなDNAを拡散してもらいたいと思います。普遍的定規というものは、悲しいかな、衝突と軋轢の中で磨かれ、貫徹してゆくものなのかもしれません。

4. 一神教

最後に一言だけ申し上げますが、一神教への動きというのは、実は『リグヴェーダ』にも見られまして、資料右の5.に少しだけ書いておきました。

例えば、「インドラは旅行く者の、[旅支度の]解かれた者の王(本来はヴァルウナ)である。角のない、そして角のある[獣]の(本来はルドラ)、ヴァジュラを腕にする彼は。彼こそが、また、王として諸々の境界を統治する。車の外周が諸々の輻を[包み込む]ように、それら[全て]を包み込む」とあります。これが旧約聖書でしたら、唯一神の宣言のような重要な文になっていたのでしょうか。複雑な書かれ方をしています。はっきり言えば、「インドラはヴァルウナだ。インドラはルドラだ」と書いてあります。インドラが唯一神だという宣言です。この動きは貫徹しませんでした。

一神教への動きというのを、少しそこに纏めてみました。アメンヘテプ4世、紀元前14世紀ですね。これが一段古いようです。それから、ゾロアスター



部門研究1

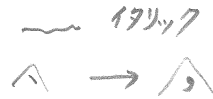
「一神教の再考と文明の対話」研究会

(Zaraθuštra) の年代は不明とせざるを得ません。遠慮して、紀元前1000年より前、『リグヴェーダ』の編集(紀元前1200頃)に近い時代と言っておきます。リグヴェーダについては少しだけ触れました。それから、ユダヤ教について私はよく知らずに紀元前2000年紀の終わり近くかと思っていたのですが、バビロン捕囚解放後と一般には言われているようです。そうなりますと、紀元前6世紀と言うことになるのでしょうか。やはり、ユダヤ教の神観史が重要な跳躍の鍵になるのではないかと推測します。

このように一神教への動きは起きたけれども成功せず、波が動いた紀元前2000年紀の終わりころの、その最終段階で、一番東の端、そこで当時の「世界」が終わるという場所で、ゾロアスターが貫徹した。それが後の世界に大きな意味を持ち、ヴィッ

ツェルの講演レジュメから一部転載させてもらいましたが、現代まで繋がっているのではないか、というところが私の乱暴な印象です。この経緯の中では、私の全く知らないユダヤ教については、考察から除外しました。

普段はこのようなことをまとめて考えることはなく、『リグヴェーダ』を訳したり、『アヴェスタ』を読んだり、文法をやっているのが私の生活ですので、その辺は割り引いてお聞き下されば幸いです。今日は少し海の中から出てまいりまして、大きく息をして、少し息を吐きすぎたかもしれませんが、何か役に立つことがあれば、あるいは私自身が教えて戴いて、息を吸わせて戴ければと思います。「一神教」そのものについて、私の考えることについては質疑の中で表明できたらと思います。以上です。



東京 2006.12.16

古代インドイランの宗教から見た一神教

後藤 敏文

(gotop@sal.tohoku.ac.jp, cf. http://www.sal.tohoku.ac.jp/indology/)

1. R̥gveda I 160 「天と大地の歌」に見られる印欧語的要素

1. まさにかの天と大地とは あらゆるものに幸となり、
天理 (r̥tá-) に従い 空界の見者 (kávi-) を保持するものである。
生まれ長き神¹⁾ である 両祭礼の場²⁾ の間を進み行く
清浄な神 太陽は 秩序 (dhárman-) に則って。
2. 幅広い広がりをもち 偉大な力をもち 涸れることのない
父と母とは 万物 (bhúvanāni: 生ずるものたち) を護っている。
両界 (ródasi) は 驚嘆すべき(男)女のごとく 最も大胆³⁾ である。
父が それに (もろもろのよき) 姿 (rūpā-) をもって 着せかけたのだから。
3. かの 車を御し 浄化手段をもつ、両親の息子は
賢者として万物 (bhúvanāni) を清める、不思議な力 (māyā-) を用いて。
斑の乳牛と よき精液もつ種牛を
彼は 毎日 搾って 彼の白い乳(マタハ: 白液、乳。太陽光線のこと?) を搾る。
4. この 仕事のできる⁴⁾ 神々の中で 最も仕事のできる者である、
あらゆるものに幸と (viśváśaṃbhava-) 両界 (ródasi) を 生み創った、
すぐれた精神力の発揮によって 両界を 測り分けた(創造した) [神は]
朽ちることのない支柱たちとともに 讃えられている。
5. そのような両者は、歌い迎えられながら、偉大なる 天と大地よ、
大きな名声⁵⁾ を、高い支配権を、我々に 置き定めるがよい。
それによって 我々は もろもろの境界(領域)の上に 至る所で拡がりたいので、
称えられるべき [肉体の] 力⁶⁾ を 我々のものに 送り集めよ。
1) devá- = lat. deus / ~~deus~~, alat. deiuos 「神」 < *deiuó- 「天に属する」。 *deiu- 「天」から派生: H dinos
dyáus pitā = Ζεύς...πατήρ, Iuppiter etc.
2) dhiśāne < *dʰis-ene-h₂- ~ θεός 「神」 < *dʰis-ós-, lat. fānum 「寺院」 < *fasno- < *dʰis-nó-,
fēstus 「祭礼の」、fēstum 「祭礼」 < *dʰehis-to-, fēriae 「祭日」 < fēsiae < *dʰehis-ieh₂-. *dʰehis 「祭
る、祭礼をする」(?). (dhiśānā-: cf. 西村直子『放牧と敷き草刈り』、東北大学出版会2006、p.
245f.) H dʰ
3) sudhīśtama-, dhīś 「かかる勇氣を奮い起こす」 < *dʰers-, cf. θάρσος, got. ga-dars-, 英 to dare
4) apās- ~ āpās- 「仕事」 = lat. opus < *h₂épes-, cf. ドイツ語 üben
5) māhi śrávas = μέγα κλέος
6) ójas- ~ lat. augustus < *h₂éugs-to-



2. 「Asuraたち」とDevaたち: インドイラン共通時代の神々の世界

2.1. デーヴァ *devá-* (イラン *daēuua-*, → 2.5.): 古来の自然神、英雄神、機能神。Indra, Aśvin (Nāsatya), Rudra, Agni、天、地、太陽、曙、密酒 (*mádhū*); 一 権限賦与、工作、出産、胎児成形)。インドイラン共通時代になってから: Soma = Haoma (麻黄 Ephedra の絞り汁)。

2.2. ヴェーダ (特にリグヴェーダ) における7人の「アディティ (Aditi) の息子 (Āditya) たち」

1. Varuṇa (王権)、2. Mitra (契約)、3. Aryamaṇ (部族慣習法)、4. Bhaga (分配)、5. Amśa ([個人] 取り分)、6. 一種のジョーカー (Indra, Savitar, Marut たちなどが状況に応じて入る)、7. Dakṣa (個々の職業能力)。(人類の始祖 Mārtāṇḍa 「死んだ卵から生まれた者」 ~ Gayō Marōtan が 8 番目。)

Cf. BRERETON *The R̥gvedic Ādityas* (1981) 196ff., GOTŌ Vasiṣṭha und Varuṇa (Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik, 2000, 147–161) 159ff., 後藤敏文「人類と死の起源」(北條記念論集『インド学諸思想とその周延』, 2005, 415–432) 424。社会制度の神格化: 祭司階級が「文書」(ことば) を専ら管理していたという社会のあり方 (GOTŌ 159)。

イラン Varuṇa ヴァルウナ → Ahura Mazda, Mitra ミトラ = Miθra (太陽神、ミトラ教へ)、Aryamaṇ = A'riaman 「教団」、Bhaga バガ → Baga 「神」(ロシア語でも)

2.3. *āditi*-「無拘束、自由」、就中「罪からの自由」~ アヴェスタの女神 Anāhitā 「縛られていない、自由な」: GOTŌ Vasiṣṭha und Varuṇa 160f., 更に OETTINGER *Die Benennungsmotiv der iranischen Göttin Anāhitā* (mit einer Bemerkung zu vedisch Aditi) (München Studien zur Sprachwissenschaft 61, 2001, 163–167), KELLENS *Le problème avec Anāhitā* (Orientalia Suecana 51–52, 2002–2003, 317–326)。

Loan translation?: どこから? 母権社会との遭遇 BMAC? *Arəduuī Sūrā Anāhitā* 「助長促進する、勇敢な、不羈の[女]」、イラン側には残存ないし再浮上する環境があった。

2.4. アヴェスタの「神聖な不死の者たち」Aməša Spənta: 7者と述べられる。しかし、列挙されているのは6、7、または8など。代表的なものは:

1. よき思考 (*vohu- manah-*)、2. 最善の真理 (*aša- vahišta-*)、3. 望まれるべき支配権 (*xšaθra- va'riia-*)、4. 神聖なる正しい思考の備え (*spənta- ārmajiti-*)、5. 全きこと (五体満足であること) (*ha'ruuatāt-*)、6. 不死たること (*amər' tatāt-*)。

2.5. インド *ásura*- 「主、家父長」= イラン *ahura-*。元来 Varuṇa (*「覆って主宰する者」?) に当たる神の Epithet と想像される。「アスラたち」= ヴァルナとその他の社会制度神たち。

インド *ásura* → 恐ろしい神々 (cf. 1. I 160, 3 *māyā-*)、マヌの子孫 (インドアーリヤ人) とは別の人間たちを守護する神々、神々の敵 → 阿修羅。↗ *devá-* 「天に存する(種族)、神々」のまま。

イラン (Zarathuštra による改革、Mazdayasna 教) ↗ *ahura-* → *Mazdā-* (...) *Ahura-* “‘der Weisheit, der Herr’ → *Ahura- Mazdā-* ‘Herr Weisheit’ → *Ahuramazdā-* 「アフラマズダー」。(Weisheit? Meinungsbestimmung, also Vernunft?)。↘ *daēuua-* ダエーワ: 神の名に値しない悪い神々、悪魔 [正しくない人々を助長する神々]。

〜 小カビ°

小カビ°

小カビ°



3. インドイラン共通時代の死後の観念

3.1. 自分の生前の蓄えと死後天界で合体

イラン

Haḍōxt Nask II 9: 正義の者が死ぬと、死後三夜目が過ぎた夜明けに、daēnā「(宗教的)思慮」が15才の極めて美しい娘の姿で彼の魂(“ruuan-”)の前に南風とともに現れる:「君は良い(善い)思考によって、良いことばによって、良い行いによって(cf. 身口意の三業)によって、良い(宗教的)思慮によって、[もともと]愛らしい私を一層愛らしく……した」。→魂は4歩で(善思[星]の世界、善語[月]の世界、善行[太陽]の世界を経て)無始の光に達する。先人の一人がどうしてここへ来れたのかを問う → アフラマズダーが遮る:彼に尋ねてはいけない。追放のある危険な道、骨と意識の分離に通ずる道を歩んできた彼に問うてはならない。春のバターを与えよ。云々。[骨と意識の分離 → 輪廻の基盤]

(正しくない者の場合には、無始の暗闇、毒。)[エリアーデ『世界宗教史』I § 111参照。]

インド

· Jaiminiya-Brāhmaṇa I 19.50 (B.C. 650前後か): 自己(ātman-)は息子と天界とに再生する。後者は毎晩毎朝のミルクの献供による。死ぬと息(prāṇā-)が出て行く。神々に善悪の行為の総量を報告。季節たちが尋問: 閏月による輪廻の秘密を答える。これにより通過。→太陽に至る。[君は誰か]と問われる。答えると、生前晩朝の儀礼によって天界に届けられ蓄積されていた ātman- が返却され、地上への再生の道へ。「kaḥ 'who'」と答える。→ブラフマンの世界へ。

· Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad (B.C. 600頃か): 死ぬとき出て行くものは[アートマン ātman-— 気息(生氣、prāṇā-)— 感覚諸機能(これらがアートマンに連結することにより識別能力・認識 vijñāna- が生ずる)] → 天界で知識技能(vidyā-)と行為(kárman-「業」)と合体、これらにより天界での長い生活を享受(普通の祖霊はガンダルヴァとなる) → 地上へ再生するときには「前世までの洞察力」(pūrvá- prajñā-)が後についている(道を知る能力 → 般若波羅密)。

3.2. 共通時代の「自己」: ásu- = ahú-「実在」。Yama = Yama (Yima) の二匹の犬(cf. ケルペロスの犬?: 印欧祖語時代?、後から優秀な猟犬が普及した?)。「魂」「氣息」「アートマン」は後の発展とも考えられる(→ 上の Jaiminiya-Brāhmaṇa の「氣息」が Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad の「アートマン」(これも原義は「息」、= Atem、*行き交う者)に当たることに注目)。

3.3. 「橋」: インド 天界、不死への橋(石を置いた飛び石の橋、sétu-)。仏典や、中期のウパニシャッドでは「剃刀の刃」(正しくない者は渡れない)に言及される。

イラン cinuuant-「償う者」の橋(perətu-、cf. ford、Furt、fjord :: tirthá-、par'/pī'「渡す」、tar'/tī'「渡る」)

3.4. イランでの天界での魂のあり方と裁きの橋(さらに「裁き」「裁判官」)の概念は「終末論」の存在から整合的に理解される。このことは同時に → 一神教的性格。(終末論はインドイラン的死後の観念の延長上にある。インドはこれを「輪廻」への道を探ることによって回避した? ここにも Ahura と Deva との違い。)[詰め方、構成する方向の差。]



この場合の「終末論」とは：世界の終わり、総決算が来るということ。そこへ向かって見る場合には、時間は直線的に捉えられる。後のインドで顕在化してくる「ユガ期」の思想では、この「直線」が繰り返しの円環の中に位置づけられ、円環の方が意識・重視される。）[→ 預言に道を開く（インドにおける完結した円環は永遠を保証するという観念）]

4. 善悪二元論と一神教

spənta- mañyu-「神聖な精神、意志（*思考を形作ろうとする[もの、m.]）」 :: *anra- mañyu-*「悪い精神」。「神聖」ということばの意味如何。**kuen-to-*、*aksl. šveñas*、*švetú* 'sacred'。インドには現れなかった[ただし → cf. 1. I 160、4 -*šam-*]。

善悪二元論 + 排他的拡張主義（排他：ただし共通の法観念以外を排他、契約を重んじそれを最大限有利に使おうと努力する）< インド・ヨーロッパ語族の拡大主義（経済）、

1. Kugan からDonau越え、東のBMAC域へ、2. ギリシャ諸部族の地中海への進出、3. 海の民、4. Alexander、5. ゴート族、6. フランク王国、7. Angel-Sachen-Juten、8. 大航海時代と May Flower ::

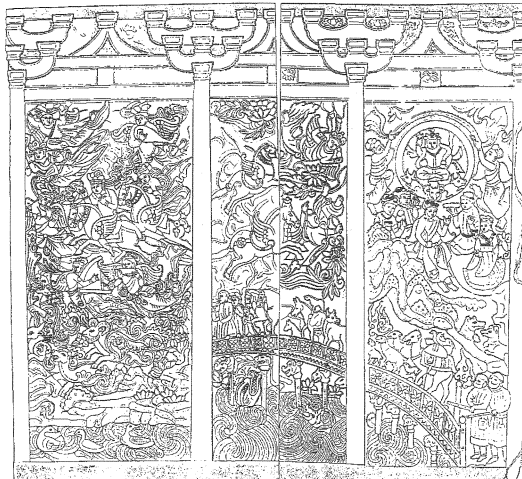
普遍の拡大：Aristoteles、三段論法、普遍理性を明解に示す活動

守り→支配権の必要性、アケメネス朝の果たした役割？（Cyros ca. 639、Cyros the Great 559—529、Darius the Great 521—486、Xerxes I 486—465、cf. Herodotus 490/480—424?、Thukydidēs 460—396?）

政治（統治）的ideology 的性格？（日本の受容的排除主義に見られる択一主義 [：只管打座、専修念仏、南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経] は統治的と断言できない。）

現世と全能者

<裁きの橋 後6 C前半、西安出土、ソグド人商人史君 (Wirkak) 墓石槨(吉田豊氏に論文あり)>



From BAI 15 (August, 2005) Judith A. Lerner: Shorter Notices “Les Sogdiens en Chine—Nouvelles découvertes historiques, archéologiques et linguistiques” and Two Recently Discovered Sogdian Tombs in Xi’an. pdf file

<<http://www.bulletinasianinstitute.org/m0.htm>>

家族が揃っている：終末論を前提。↔ 輪廻（親子の間を説明できない個人主義）



5. R̥gveda に見られる「唯一の神」

「インドラは旅行く者の、[旅支度の]解かれた者の王(本来はヴァルウナ)である。角のない、そして角のある[獣]の(本来はルドラ)、ヴァジュラを腕にする彼は。彼こそが、また、王として諸々の境界を統治する。車の外周が諸々の輻を[包み込む]ように、それら[全て]を包み込む」 I 32、15 (12に「唯一の神は」)

X 巻の各種創造讃歌も唯一の創造者を歌う点で、「唯一の神」を求める思弁のインド的形式。Hiranyagarbha (金の胎児)の歌 X 121 「どの神に我々は供物をもって分かち与える(を満足させる)べきだろうか。— 続く散文文献(“brāhmaṇa”)の時代にはブラジャーパティPrajāpati(繁殖[子孫、生物たち]の主)が中心に。ヒンドゥー教ではヴィシュヌ、シヴァ(ルドラ)、(ブラフマー)。Hiranyagarbhaの歌に同表現多い。Viśvakarmanにもあり。ヒンドゥー教のヴィシュヌ、シヴァ崇拝とは?

アメンヘテプ4世 B.C. 1352–1336

(アテン神の図像はŚatapatha-Brahmaṇa–Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad [B.C. 650前後中心?]に語られる光線の通路の理論に似る)

Zaraθuštra ?

RVの編集に近い時代 B.C.1200頃

ユダヤ教? バビロン捕囚解放 B.C. 538

個人の力では無理。部族社会。部族の成員の一致した支持が必要。外圧? 切実な選択?)
(「世界」の果てで貫徹。強固な支配権の必要。)

6. メモ 雑思雑録

多くの神々があった/ありうる中で「唯一の神」という意味での「一神教」[拝一神教]

その唯一神の側の世界とそれ以外: 悪い神々、悪魔、彼らの支える種族

選択、信仰告白 (アヴェスタ *frauuāšī*)、cf. *śraddhā*- ~ *crēdō*

一神教環境下に生まれた者の入信

唯一の神が全てを創造し管理しているという意味での「一神教」は理念的軸として、ないしは、信者内部の閉じた世界内でのみ考えられるのでは (?) [唯一神教]

神の側から見て正しい者 :: 悪い者、正しい者たち :: 悪い者たち

人の側から見て正しい神 :: 悪い神 正しい神々 :: 悪い神々

Goethe の「確信」→ 宇宙原理としてのブラフマン *brāhmaṇ*-

「多神教」は単なる消極的無神論(正確には: 積極的に唯一神を認めることがない論)の一種とも。真の無神論者はAntichristのみ。

一神教環境中の消極的・受身的信者が多い(共感を持っている ↔ 不満である)。それ以外の環境下の諸々の段階に配される普通人との相違点も検証する必要。[世俗化]

年表(歴史軸: 多様な → 世界史へ)と世界地図。世界史をもたらした人々とその信仰的背景。



- ・世界の終末における最後の審判 :: 最後の審判
(ガーサーに既にある:《熱した鉄》)
- ・狭いcinuuaŋt-《償う者》の橋を渡る: / 2
- ・悪い者たちは溶融した金属の中に落ちるであろう :: 信じない者たちには永遠の地獄(の火)
- ・一定数の人だけが助かる :: 144000人が助かる

公式の新約聖書の最終巻、紀元100年あたりにパトモス島でヨハネによって作られた『黙示録』は多くのイラン的なイメージを含んでいる(<http://www.sacred-text.com/bib/kjv/rev001.htm#001>参照)。「多くのプロテスタントの教派は「歓喜(The Rapture)」と呼ばれる呼ばれる出来事が来ることを信じており、そのときには、信者達は文字通りに、彼らがたまたま居合わせた場所から引き抜かれ、天国へと運ばれる。」『黙示録』は(アメリカの)キリスト教原理主義者たちとG. Bush 2世(また、T. Blairとという人もあるかもしれない)のおかげでよく知られている。彼らは「歓喜(Rapture)」が今やって来つつあると信じている。ここにも、イランの宗教が果たした重要な影響、「東と西」について、よく検討しなければならない理由がある。

イランの宗教の政治的影響

ゾロアスターの思想は、遅くともダリウスとクセルクセスの時代以降(B.C.519—)、ペルシャの領域に影響力を持っていた。彼らの正確な信仰内容は知られていないが、クセルクセスがダイヴァ daiva信徒を迫害したことに関しては明らかである。これが、多分、我々が見る、「善と悪」の概念に基づいた最初の宗教的迫害である。(太陽信仰(Aton)に対するエジプト人の運動のような、より以前のは宗教的かつ政治的なものであった。つまり、古い僧侶グループ(Amum)が新しい宗教に対抗したのである)、『ヴィーデーヴダート』に詳しく述べられている、ゾロアスター教僧侶の振る舞い方と処罰は、ムッラフMullahたちとタリバンTalibanの態度を想起させる。

このことは、またしても、(コンスタンティヌス帝からまっすぐに続く)ローマ時代とキリスト教徒の歴史に起こることに、多いに符合する。「異教徒」迫害、ミスラ教、マニ教徒、アリウス派、十字軍、宗教反革命、異端諮問、魔女狩り、など。

イランの影響はキリスト教における二元論(マニ教から改宗したアウグスティヌス、354—430依るところが大い)に力を与え、引き続き政治の場に形を変えて現れ(マルクス主義など)、そして驚くべきことに、今日、ブッシュの「我々と共にはない者は敵だ」、ならず者(悪者)だという発言にまで、反映している。

これら正体のはっきりしないイランの諸宗教が、ヨーロッパ(とそれを越えた地域)にとって、それほど重要になりえた、ということは奇妙かもしれない。東方では、(マニ教の)布教活動が中央アジアや中国の領域(17世紀まで)にあった。イランは、要するに、エジプト/メソポタミア、中国、そしてインドという偉大な古代文明の間に位置し、しばしばそれらの間をつなぐ架け橋となった。

同志社大学21世紀COEプログラム
一神教の学際的研究
文明の共存と安全保障の視点から
2006年度 研究成果報告書

2007年7月31日発行

発行所:同志社大学一神教学際研究センター
〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL:075-251-3972 FAX:075-251-3092
e-mail:info@cismor.jp

印刷所:株式会社 図書印刷 同朋舎
〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町2
